

貨車に乗せられ、今度は東へ東へと進みました。バイカル湖を左に見ながら、十日くらいかけてナホトカの港に到着しました。久しぶりに見る海に喜び、そしてこの続きに日本があると思えば嬉しさで胸がいっぱいでした。ナホトカで一週間ばかりの日がたち、いよいよ乗船です！ 高砂丸と大きく書かれた船体に思わず合掌したのを覚えています。

六月二十四日に乗船したと記憶していますが、六月二十七日舞鶴港へ入港しました。緑に包まれた舞鶴が見えると、思わず「万歳万歳」と叫びました。

帰国してちょうど五十年の歳月が流れました。人生喜びあり、悲しみあり、苦しみあり、いろいろですが、舞鶴へ帰国第一歩を踏み締めたときが私の一番の喜びです。

帰国後、父の家業「建設業」を継ぎ、公職（町議会）も六期続けています。そして、陸軍通信学校八期会という会があり、毎年一回同期の集いがあります。入校した頃は十七、八歳の少年でした。歳を重ねお爺ちゃんになりましたが、毎年会って、昔のことや、捕

虜のときのこと、内地勤務の者のこと、話し合うことも楽しみの一つです。

色々書きましたが、記憶もまばらで、まとまらない点、お許しください。

抑留記

愛媛県 鹿島智夫

昭和十一年二月二十六日、東京近衛師団が武装して首相官邸を襲撃し事件を起こし、北満の孫呉に追放された部隊といわれている二〇二部隊に、私は十九年六月に入隊した。なだらかな丘を上って私はびっくりした。広い練兵場の高い塔に「鹿島台練兵場」と墨痕鮮やかな大文字が書かれているのである。私の姓と同じである。私は目を疑った。何という懐かしい文字であろうか。十メートル以上もある四角い、そして真っ白いこの塔は、夏の日に輝いている。何とも言えない誇らしい気持ちになる。ようし、俺は頑張るぞー、拳を

んだ。笑いながら「もう一遍言ってみろ」「ハイ」
大きな返事をして同じ言葉をもた繰り返す。初めは
笑っていた古年兵達が「フーン、こりゃよう判った、
優秀じゃ、捜してやるよ」こうして三つの班を回った
が、その日は禪は出なかった。翌日の昼、草刈上等兵
がニコニコとしながら「鹿島、越中禪が出たぞ」と
言ってくれた。横州が喜んだのは言うまでもない。

それから後、私の名は中隊の中でも知れわたった。
優秀な兵隊がいるというのである。今まで禪のなくな
る事はずっと続いていたそうであるが、その都度、外
の者の禪をこっそり取って都合をつけていたそうであ
る。それ以来、禪、襦袢、皮帯などの被害はほとんど
なくなった。今までは戦友同士でも盗み合いを平気で
していたのである。

軍隊といえは軍事教練をする所とはかり思っていた
が、二〇二部隊は塹壕掘りが主であった。朝から晩ま
でスコップで土をはね上げる。ロシアの侵入を防ぐ為
にはこれ以上の大切な事はないだろう。弾の撃ち方な
どは一通りの訓練で充分で一日一時間もあれば足り

る。兵隊は皆スコップを担いで塹壕掘りに精出した。
私は少し風邪をひいたようにで熱が八度近くあったが、
休んで怠けるように思われてはいかんとそのまま山へ
行った。一生懸命でスコップを振っていたら汗が噴き
出る。汗がだらだらと流れたら風邪は必ず治るもので
ある。これは島で働いていた頃からの風邪の唯一の退
治法である。塹壕の高さ約三・五メートル、上部の幅
も約三メートル、また底辺は約一・二メートル。初年
兵は真面目であるからサボることはなく土をはね上げ
る。開拓団でスコップはよく使っていたし、また島で
井戸掘りをしたりしたこともあり、スコップを使うこ
とには慣れていた。私は風邪を治したい一心で高く遠
くスコップを振った。砂地であるから掘りやすく、人
の倍くらいは掘った。全身、湯から出たようにたらた
らと汗が流れる。

誰か人の気配を感じたので何気なく見上げたところ、
日比見習士官であった。私の働きぶりをしばらく見
ていたのであろう。いきなりピーッと笛を吹いたと
思うと「全員集まれーッ」と号令をかけた。付近にい

た三十人、四十人くらいの兵が私の壕のそばに集まった。私の顔を知っている見習士官は「鹿島の汗を見よ、鹿島は兵の模範だ」。掘り出した土の量は一人分の倍はあった。「鹿島、少し休め」そう言ってくれたが、私は休むことはしなかった。風邪が大分抜けたようで頭も大分軽くなっていた。ありがたい塹壕掘りであった。その頃塹壕掘りの帰りには薪を一本ずつ担いで帰ることになっていて、古年兵も初年兵も適当なものを皆担ぐ。初年兵の中に谷野、木の内、横州、森本の五十歳台がおり、木の内が一番やせて小柄でもあった。私は父を思い出してこの薪を担いでいる木の内の分を、「木の内、俺が担いでやるから俺に渡せ、何も心配は要らぬ、俺はこんなもの二本くらい担いでも何でもないよ」。五メートルくらいのは先を引きずるようにして下りるから、手元だけ肩にのせておればよいので一本担ぐのと同じに軽い。戦友の薪など担ぐ者はなかった。

ロシアの飛行機が飛んでいるという噂が立った。翌日、私は佐矢という伍長と二人で塹壕の警備に就い

た。近くに部隊の兵舎が建っている。この兵舎に爆弾が命中して火の玉がはじけ飛ぶ。二人のいる塹壕の中にも火花が飛び散る。しかし、恐ろしい気持ちはいささかもなかった。肝を据えていた。黙っていた伍長が静かな口調で言った。「鹿島、奥さんの写真があるじゃろう、見よ」。私は、胸に秘めていた妻と半年目に撮った赤ん坊の娘の写真を壕の中で見た。伍長はこれが別れだと言って、水筒の蓋で水盃を交わした。コンソリデーテッドという気味悪いロシアの飛行機が低空をかすめる。伍長は伝令を受けて壕を去った。私は何もせず小銃を持ったまま夜を明かした。一睡もしないで翌日、本部へ帰った。中隊長は生存者全員を集めて悲痛な宣言をした。敵の戦車三十台が、今日、中隊を襲う。これを潰滅せねばならぬ。今中隊に残っている者は三十人しかいない。外の者はどこにいるか判らぬ。一人ずつ戦車に突っ込まねばならない。そう言う中隊長の目は血走っていた。三十人の者は、平素から特別の訓練を受けて来ていたので急造爆雷を自分の手で胸に吊り、戦車の通る道を黙々と歩む。橋のたもと

にかかったとき小隊長が命令した。「皆、伏せ」全員
カヤの中に伏す。オミナエシが沢山咲いていた。顔に
ふれて甘い香りを放っていて懐かしい気持ちであつ
た。耳を澄ましていると戦車の響きがする。だんだん
と音が高くなる。いよいよ来たか、覚悟が決まる。私
は七番目に突っ込むことになっている。

山が裂けるような轟きである。鴻毛の軽き命を思う
ことはなかった。大型か小型か、それを先に見極めて
から突っ込むタイミングを計らねばならない。早過ぎ
ても遅過ぎてもいけない。肉体が戦車の下敷きになっ
た時爆発しなければならぬ。胸に抱いている急造爆
雷を両手に伸ばすと、二、三秒の間に爆発する。七、
八メートル前で両手を伸ばすと先ずの中する訓練をし
てきたので、心にいささかの動揺もなかった。戦車に
当たらないうちに爆発したり戦車の後で爆発したら大
死にであるから、肉攻兵は厳しい訓練をしてきた。と
ころがどうしたことか、地鳴りの音がだんだんと低く
なるようで不思議に思っていたところ、次第に遠のい
てしまった。張りつめていた肉攻兵はホッとした気持

ちで喜び合った。間もなく馬で駆けてきた伝令が声を
上げた。「日本は降伏だ、無条件降伏だ」二回叫んで
本隊へ消えた。「無条件は信じられん、しかし嘘では
ないだろうが帰ってもしょうがないぞ。下へ下りて焼け
跡の中から何か見つけて食おう」小隊長の言う通りに
二〇三部隊の焼け跡の家を探す。中に軍の倉庫のよう
なものが残っていたので探していたところ、乾パンと
さくら餅が沢山あったので、ありつくことが出来た。
驚いた事に軍馬が気の狂ったように暴走していた。ま
た、丸い爆雷が至る所に散らばっていて、敗残兵の町
という思いが切実であった。二〇三部隊は一週間前か
ら逃亡兵などが出て支離滅裂となっていたのである
が、私達の二〇二部隊には何の連絡もなかったのでは
る。

明くる日はまだ帰っていない兵があつたが、銃器返
納ということで無事に済ませた。二日ほど過ぎて全員
練兵場に集合した。部隊長は無帽のままである。丸裸
同然の身には佩刀もない、誠に哀れな姿である。何か
言ったようであつたが、低い声で私には聞き取れな

かった。その後のことは知る由もなかった。その日、ロシア兵が四、五人、兵舎をのぞき込んで来た。如何にも尊大ぶった顔つきをした女の兵隊が二人いたので驚いたが、その顔は何とも醜い大醜女で、デブデブに太っていて、二人とも怪物のようだった。また、兵は十六、七歳の少年であり、銃を逆さに肩から吊り皮でぶら下げている。こんな奴らに負けるとは……と皆が無念がっていた。色々な物を整理して二〇三部隊に降り、約二十日余り過ぎた。敗残の身には何の楽しみもなく、乾麵包六十粒入りが一袋、二日分として渡されただけである。

開拓団当時の第一副団長だった朝光先生に出会った。戦争になると転属する者が多く、戦友達ともなかなか巡り会えなかったので喜び合い慰め合った。「鹿島君、わしが米を一袋持っているからやるよ」そう言って二合入りの小袋を一つ頂いた。一緒に入植した当時から丸太小屋で寝食を共にし、また、本部で事務をとり、六年間一つ釜の飯を食った莫逆の友である。

それから二十日ばかり過ぎた頃、全員集まれという

ことで荒れ果てた広い家に入れられた。そして、この中に泥棒が二、三人いる。兵隊の物を盗んで食うた者は謝れ、正直に謝った者は許す、と言われたが誰も白状する者はなかった。ついに業を煮やした係の人は、全員お辞儀に座れと言う。きつい声である。半時間くらいお辞儀をすると足がしびれる。外へ出よと言うので、許されたものとばかり思っただけ皆門口に向いて立つ。最初の男が門の扉を開けた瞬間ウーッとうなり声を上げた。木刀を持った男が構えていて頭を振りつけたのである。不意打ちに木刀で撲られたものだから、たんこぶは当然だが、血が出て顔を染めた者もあったという。私は大きなこぶができて目の中で火花が散った。これで目から火花が散ったのは二度目である。この男の名前は誰も知らなかったが、営倉から出た男であつたらうという噂であつた。私の戦友朝光先生は剣道三段、柔道二段の猛者であつたが不意打ちにやられたかもしれない、と私はしきりに考えていた。

二〇三部隊にて二十日余りを過ごした。全滅した孫呉の町の部隊から二〇二部隊の空を仰いだ。一心に軍

務に励んだ部隊であるから故郷のような思い出がわく。中隊員たちは行方の判らない者があり百人ぐらゐであつた。中隊長も転属して北村中尉になつていた。

二十年九月一日、シベリアへ連行される第一歩を早朝より踏み出す。若いロシア兵が先頭と後尾につき、中隊長が先頭のロシア兵のそばについて行く。荒涼たる荒野を敗戦後、乾麵包三十粒で耐えてきた兵たちの足取りは重い。おまけに二十キロ以上ある背のうを背負っている。よろよろと歩くさまはまさに屠所の羊である。シベリアの労働に従事する為にエンピ、十字鍬、防寒着類一式、どうしても二十キロ以上になる。ロシア兵は歩幅が広いから歩くのも速い。日本兵の行軍は普通一時間五キロメートルであるが、ロシア兵は六キロであるから、ついて行くだけで大変疲れる。先頭にいる者はロシア兵について行けるが、次第に遅れて三段階くらいになり、先頭と後尾の差は百メートルくらいになる。

夕方ごろ、公文上等兵が足が動かなくなつて座り込んだので、近くにいた義勇隊出の若い二人が両腕を肩

に乗せて支え合つたが三、四十メートルばかりで遂に足が交わらず遅れてしまつたので、そのまま見放されてしまつた。支えている義勇隊も二十キロ以上の背のうと風呂敷包みを提げているので仕方なかつた。私達は公文の体が小さくなくて荒野に転がつているさまを何度も振り向いた。日が暮れて茅原の中に丸寝をしなから公文の哀れな命を思いやつた、判りきつた命だからである。狼の群れに食われてゆくさまを想像するより外に考えられない命だからである。公文上等兵は実に初年兵に優しい上等兵であつたが、風邪をこじらせて微熱が続いていたそうであつた。私は一緒に歩いてきた木の内が弱つてゐるようなので「木の内、俺が風呂敷包みを持ってやるからへたばるな」と何度も木の内を励ました。私物は小休止の度に捨ててゐる者が多かつた。私は段畑で育ち山道を歩き通してゐたから全く平気であつた。両手に風呂敷包みを提げてシベリアに着くまで歩き通した。木の内は泣かんばかりに私に礼を言つた。後で判つたのであるが、この風呂敷にはハルピンで六年働いた三万円を包んでいたのである。メル

ゼンの墓掘りで一週間目にクイブシェフカの収容所に入った私とは二度と会えず、鹿島の恩はよう忘れぬと戦友たちに洩らしていたという。手の切れるような百円札を、煙草の巻紙や尻ふきにでもと皆に分けてやったそうである。そして鹿島へと百枚別にしていったそうであるが、私に会う事もなく、木の内の死後、戦友たちが煙草の巻紙に使った。後に私を訪ねてきた生き残りの七人が優しく看取ってやったそうである。

四日目の夕方、小休止がかかった。小休止は午前中と午後三時ごろにかかったのと思っていると、目の前に馬鈴薯畑と人参畑が広がっている。ロシア兵が捕虜を哀れんだのであろう。長い列をしていた捕虜の群れが一度に走り寄った。背のうを背にしたまま獲物に襲いかかる獣のように畑を埋めた。両手で馬鈴薯を掘り人参を抜き、泥のついたままバリバリと噛む。敗戦から一カ月、腹を満たしたことの無い飢えた狼である。物すごい形相である。まさに餓鬼であった。瞬間に広い野菜畑は黒土に変わった。後尾を歩いていた者たちも一目散に走って充分腹を満たしたようであっ

た。驚いたのであろうか、この付近に中国人の姿は一人も見当たらなかった。恐ろしくて逃げたのか、あるいは仲良しだった日を思って哀れんだのであろうか。六年間中国人と付き合ってきた私は、胸をかきむしられるような思いであった。それから後、シベリアへ行くまでに同じようなことがあったが、不思議に悪い気持ちは起こらなかった。

国境線に近づいた時、中国人の部落に出合った。広い土壁の中には草ぶきの平屋が十軒ばかり建っていた。先頭のロシア兵が小休止をかけたので、見ると死体が転がっていた。カーキ色であるから日本兵である、恐らくこの部落を拠点としていた日本の兵達である。すでにこの場所を通った人たちの跡がカヤを踏み倒して、兵の屍をつなぐようについていた。その一つ一つを急いで拜む。行軍中であるので立ち止まることは出来ず、殊に私は両手に風呂敷包みを提げているので、右手に持って片手で拜みながらの全く素通りであった。最も驚いたことは、屍の眼窩、鼻、口、耳から蛆が湧いて顔一面コロコロと転げ落ちる。屍となり

て二十日余り、腐敗した同胞の亡きがらを拜んで名状しがたい憐れを覚え、人間の運命をしみじみと考えていた。それから六十年近い歳月が過ぎたが、このときの兵たちの姿は今も脳裏に焼きついて離れない。

捕虜は下を見て歩く。道に転がったものを見逃してはならないからである。上を見て歩く捕虜はめったになかった。拾って食うことは捕虜のみに与えられた特権のようなものである。他人の物を盗んだり騙したりした物ではないので一心に下を見て歩く、そして命をつなぐ。大きく言えば国家の償いをする責任がある。自らを卑下してはならない。捕虜としての任期を全うしなければならぬ。こんな気持ちを保つようになってから私は気分が落ち着いていた。人の道に背いたような行いをした覚えは、シベリアの日々を省みて一度もない。今日はジャガイモを拾ったと言って戦友にやるのを見たとき心を打たれた。飢えていたからめったに見ることのない有様である。

正月の近づいた頃、私も皆と一緒に列を飛び出して転がっているジャガイモに走った。うまく拾ってポ

ケットに入れた。初めてのことであり、とても嬉しかった。内心わくわくしながらジャガイモのことばかり考えて、時々外套の上から押さえてみる。一日中よく凍っている。今日は食べるぞ。班の門に帰ったので急いで取り出した。少し解けかかっていたので、すぐ口に入れるつもりだったが、よく見ると間違はなく馬糞であった。驚いたというより内心恥ずかしくなって辺りを見回したが、誰もいなかったので門を出て道に放った。翌日このことを横州に話した。「なあんだ、俺もこの間拾ったら馬糞だった、あれは区別がつかぬ」と事もなく言っただけだ。すでに大方の者が体験済みであった。馬糞は粗飼料が主で濃厚飼料が少ない為コロコロと出るときが多い。特に冬期は水分が少なく転げやすい。煉瓦のかけらが転がっていると、これも黒パンにそっくりである。黒パンはジャガイモのように霜がギラついてはいないが、見た者は列を飛び出す。ロシアには小型の薄い煉瓦が窓枠などに使用されていたので、それらのかけらである。これは拾った瞬間、重いのでその場で捨てる。捕虜とは誠に哀れなも

ので、飢えてしまうと似たものは何でも食い物に見え
錯覚に陥るようである。

兵舎の屋根を直せと命ぜられた事がある。兵舎は厚
み約六十センチの赤煉瓦で建てられているが、屋根は
トタン一枚である。平屋で間口約五メートル、奥行は
十八メートルぐらいあったようで、二列に並び十棟以
上あったように思う。トタンは赤く塗られていたが、
軒端の方はめくれていた所が目についた。四、五十
メートル離れた後ろには党の司令部が敵かな形で建っ
ている。私達は箒で屋根をきれいにし、まくれたトタ
ンを金槌で伸ばしながら釘を打つ。日本の兵舎であれ
ば取り替えるようなトタンを、またそのまま使用す
る。外観は立派なようだが、兵舎を見る限り誠に粗末
であった。掃除を終えて下で休んでいたとき、一人の
男がまだ屋根で仕事をしている。下りて休めよ、皆が
声をかけるが下りて来ない。「雀がおるんだ」そう
言ったかと思うと雀の裸子を掴んでバクリと口に放り
込んだ。見ていた者らがうらやましがった。「うまい
ことやったもんじゃのう」「俺はのう、チリ毛がある

から雀がいると思っていたんじゃ」そう言ってニタニ
タと笑っていた。

それから、休んでいる私達にロシア兵が中へ入れと
言うので、皆喜んで入って行った。日本の兵舎と同じ
で、両側は板張り、中が通路である。中に入ってびっ
くりした。誠に雑然としていて、寝ている者、パイオ
リンを弾いている者、ハーモニカを吹いている者、ギ
ターを弾く者など、まるで宴の場面のようにある。こ
れが兵舎とはとても思えなかった。言葉が通じないの
で何もわからなかったが、ロシアの内務班は実に和気
あいあいたるものであることをこの目で確認した。思
うに、軍務に厳しい戒律はあっても、軍務を終えて班
に帰れば、十分に休養して次に備えるのが民主的な考
え方である。私はそう思いつつ、敗れた日本の軍隊の
あまりにも横暴だった行爲を思つて憎しみさえ覚えて
いた。親しい軍隊ではなかったように思うのである。
風邪を引いて頭が少し痛いので班長に申し出たところ、
検温したら三十八度あった。看護兵がすぐ入院だ
ということ、毛布一枚だけでトラックに乗った。病

院の名、所もわからないまま二十分ぐらい走って暗い室に入れられた。今までの収容所は板張りであるが、フワフワした棚床でワラ布団が敷いてある。病院らしいと思っていると、看護兵がアスピリンを一粒くれた。それを飲んでグッスリ眠れた。頭痛もしないし爽快である。目を開けて見ると、目の前に何かぶら下がっている。何だろうと思って背を起こしてよく見ると、足首から切り落とした骨ばかりのような足が七本並んでぶら下がっている。風邪を引いた者がどうしてと疑問もあったが、ロシアの運転手が間違えたのである。私はそう思いながらこの病室を巡ってみたが、病室が続いて二カ所あり、ワラ布団を敷いていた。病院らしい建物はほかになかった。私は作業もなく一月ほどここで過ごした。杖を突いて歩く七人の人達は、私を見ると避けるようにしていたので私もなるべく近寄らないようにしていた。誰と話すこともなく談づまらない所であった。

クイブの収容所に帰ってから飯上げに行った。皆と雑談を交わしながら飯上げに行くのは何とも楽しいも

のであった。他の班の者と六人で飯盒を六つ提げて出かけた。炊事場のそばに箱のような小屋があった。この中に糶殻が入れられていた。先に見つけた谷が中に入り、底に薄くなっている糠を糶と一緒にかき寄せてポケットに入れていた。それを見て六人の者も同じように手にかき集めてポケットに入れた。全然粒はないので石灰を振りまいたようなものであった。ふいに「貴様ら何だ」大声に怒鳴られた。大男であった。私はしまったと思った。この男、炊事の頭であり、柔道三段である。一番近くにいた谷の首を引っつかんでぶち投げた。私は息をのんだ。そして、足で蹴り飛ばした。何回も蹴り飛ばし、蹴り上げる。その度に谷はコロコロと転がる。谷は死ぬかもしれぬ。見ていた私達は気が気でなかった。全く手ごたえのない谷に怖れを抱いたのか、頭は炊事場から姿を消していた。

谷は何でもなかったようにケロリとして一緒に炊事場から班に帰った。「俺はな、ちっとも痛い所はないよ。あんな者を相手にしたら名がすたる。腹を立ててうっかり相手の急所をつかんだら殺すからなあ」そう

言つて声を出して笑つた。偉人のような言葉であつた。沖繩県出身であり、クイブの収容所で知り合つた仲で、班では一緒にパンを分け合つた仲である。指の節の高い、そして拳のごつい男であつたが、物優しい言葉遣いだったので、そんな技を持っている人物とは思わなかつた。能ある鷹は爪を隠すという。空手六段で日本でも達人といわれていたそうだ。栄養失調でやせていた。しかし、ロシア人と試合をやるのを楽しみにして生き抜くと言つていた。誠に得がたい戦友で、私にだけは何くれとなく話してくれた。私の方が収容所を先にかわつたので、その後の消息は不明である。

夕食後の一時、班の者たちが隣の者たちと話をするときには食料事情もよくなつた証拠で言葉が弾む。私の田舎弁を聞いていた男が、一列離れた所から私に向いて「君は生まれはどこだ」「俺は伊予だ」「ああ、そうだろう、伊予弁のようだから聞いたんだ。伊予のどこだ、俺は田の浜だ」「何だ、それじゃ向かい合わせじゃないか、田の浜の沖では鰯の大漁をしたよ」。それから寄り合つて旧知の間柄となり、島の話に時を過

ごした。その男は延永と言つたが栄養不良でやせていた私を見て、「俺が毎晩飯を持ってきてやるから将校室で食え。青木という曹長が係長をしているので俺が頼みに行く。青木は俺の言う事は何でも聞いてくれるので今から頼みに行く」と言う。

翌日の夕食時、延永が私を連れて将校室に行く。一礼すると、青木曹長から「わしが青木じゃ、君か、延永の言う鹿島は」「ハイ、そうです」「誰にも心配は要らぬからのう、ここへ来て食え。段に上がることは出米んが一番下で食え、充分座れるじゃろう」「ハイ、座れます」、こうして私はその日から延永の貰つてくる飯を一カ月余り頂いた。延永は炊事に務め幅を効かせていたのである。青木曹長の許しであるから、私を少し格のある人物のように皆が思つていたようである。この将校室で私はいろいろと将校の話を耳にすることが出来た。東京が焼け野が原になつてゐるということや、暴動が起きて、女は身売りをしてゐることや、乞食ばかりが増えているなど、単なる噂ではなからうと思つていた。「もう内地には帰りたくないよ。

食い物もないだろう。ここにおればこうしてたらふく食えるからなあ」これが偽りのない将校室での言葉であった。私はいつも得心のいかぬ気持ちであった。

捕虜たち一般の者は餓死する者が多い。飯盒の底は穴が開くほどかりかり掻いている。一粒の飯、一粒の豆にも命を託しているのに……。「階級で飯を食うとは何事だ」ロシアの将校が食事のとき一度怒鳴った言葉を私は思い出すのである。その頃一般の量は飯盒の蓋に一杯程度だったが、将校達は飯盒に半分くらいあった。そして鰯や鯨などもあったようで、話の節々でよくわかっていた。それに、正門には水桶が座しているの、水も自由に飲んでた。他の捕虜には水はない。水は一日五合と決まっいて、この分は炊く時一緒に入れてあるということで、コップで水を飲んだことは一度もなかった。

私は喉が渴いてどうにもならぬとき、夜起き出て正門に行った。セメント樽の三倍くらいある胴体のふくれた樽があった。水が沢山あった。腰をかがめてガブガブ飲んだ。甘い水で、これは養老の滝の水かもしれない

んと合点していた。小学生のころ、養老の滝の水は旨いものだという話を聞いたことがあったのをふいに思い出したのである。遠い記憶であるが、父母を思って二度も三度も口をつけた。明るる日は日曜だったのでこの樽を見に来た。綺麗な水であると思ったからである。のぞいて見た時たまげた。それは真に汚い水であり、ポウフラが浮き沈みしていた。私は物も言えずポウフラの浮き沈みする様を見ていた。この汚い水がどうしてあんなに美味かったのか、不思議でならなかった。将校達は残飯や汁は惜しげもなくこの樽に放り込んでいたのである。口をつけるとすぐに沈むポウフラであるから体に異常は起こらなかった。飲み込んではいなかったのであらう。すっかり野性に同化していた自分を思っていた。

「鹿島、金玉を切り落とした者があるぞ」「何、どこの班じゃ」「そりゃわからんが、そういう噂が立つとる、お互い気をつけよう」背筋が寒くなるような酷い話を班内で聞いた。噂であり、四、五日経ってから言う者はなかったが事実だったよう、皆自らを戒め

た。便所にいても長く座っていると畢丸が冷えてくる。日本兵は昔から薄い越中褌一枚だけだからロシアでは考えるべきだったが、軍の将校達も考えが及ばなかったのだろうか。

股間は体の真ん中にあり、最も温かい場所であり、心配はないようであるが、ズボンボタンで合わすため風が入りやすい。零下六十五度の中で小便是出来ない。一度冷えきると絶対温まらないので畢丸が凍傷に罹るのは当然である。私は満州に六年、零下四十度の中で過ごしてきたから寒さに対する方法は体験していた。シベリアに来てから拾った布切れは大切にしていたので、越中に縫いつけたものが多かった。鎌倉という軍隊時代の友が、シベリアへ行ったら為になるかもしれないと木綿糸一卷きと針五、六本をくれていたので、私の越中はロシア人の捨てた布で綿のようにふくれていた。冬中これを離すことはなかったので畢丸の憂いはなかった。

体調の悪い者があると、医務室や病院へ入れるのが当たり前のようで、少し風邪を引いたようだと熱を

計ってもらったら三十八度近い熱であったが、すぐ入院ということで病院へ運ばれた。これで二度目である。思ったより頭が軽く、断るつもりでいた。病院に行くとき心が弱くなり、我慢がなくなる。絶対病院などには入らないぞと常に我慢してきたのであるが、迎えるトラックが来たので仕方なく毛布一枚を持って出た。近い所で十分くらいで着いた。広い板張りの室である。これが病院かと思うような、何一つ置物のない殺風景な部屋である。日が暮れても病院側から何事も無い。別に悪い事をしたのでもないし毛布一枚でごろ寝をした。目が覚めて明るくなった。不意に声がした。「オーイ、ゆうべ来た患者は飯じゃ」、室にも来ず戸の外で叫ぶ。返事をして炊事場へ急いだ。食台が二つ並んでいて二人の兵がいた。普通の西洋皿に山のようになり高梁飯が盛られていてびっくりした。これが病人食かと驚きもしたが喜んだ。飯盒一杯分くらいある。よし食ってやるぞ。匙を持った。今まで食ったことのない高梁飯は豆のように硬かったが、全部腹に詰め込んだのである。終わって横になっていたら二人の話

し声が聞こえる。「オーイ、ゆうべ来たのはいいタマだ。あれを全部平らげている」。いいタマというのは軍隊語であつて、ろくな人間でないとのしる言ひ方である。私はどう言われようと腹いっぱい食べた満足感で平気であつた。ところが半時間くらい経つてから急に胃がうずき出し転げ回つた。うなつていたのを聞いた炊事の二人が看護兵を呼んで、胃痙攣だと痛み止めの注射を打つてくれた。一時間近く転げ回つた末ようやくやおさまつたが、誠に辛い時間であつた。このままここで死んではならん、死んではならぬと、そればかりを必死に考えていた。本当に恐ろしいひとときであつた。

それから、昼飯に來いというので、「食べません」と言つたところ、「食べんでもよいから食堂に來んといかん」と言うので食台に着く。七、八人の患者がいた。私のそばに若い男が座つた。名前を聞いたら「大分県の水田明です」と丁寧な言ひ方で、義勇隊だつた。私は懐かしい気持ちだつた。大分には五、六年生のとき修学旅行に行き、寺の僧侶に頭を撫でられた思

い出がある。父と交流のある僧侶で、島の出身者なのである。何よりもその名前が弟と同じ明である。「俺は鹿島という者だが、今飯は食えんから君が食べてくれよ。これから三日間食べてくれ。俺は食堂に來なければいかんということであるだけだから」。食事を見ると白米の柔らかい飯である。砂糖いわしがつけてある。こんな食はほかの病院ではなかったと思う。私はこんな美味そうなものを見ても一向に食欲はなかつた。丸四口水も飲まず耐え抜いた。水田は日に二回ずつご馳走にありついたので大変喜んでいた。「嫁を貰つたら知らすからぜひ來てください」と言つて別れた。住所氏名を書いた紙片を貰つていたが失くしてしまつた。

ラーゲリーを変わることに六回目にナホトカに着いた。ヤボンダモイの噂が本当に実現した。十二月二十日ごろ無蓋車に乗る。三百五十人ほどであつた。貨車の中は冷えきつていたので、よく見たら零下六十七度であつた。一車両に二十―三十人ぐらゐであつた。途中

で何回も停車するので、どこへ行くのかもわからず不安であった。一番早い帰国だということであったが、成績の悪かった収容所は途中から伐採地帯などに追いやられたこともあるなどと言われていたので喜んでばかりはいられなかった。しかし貨車は翌日の昼ごろナホトカへ着いた。二重張りの鉄条網は汐風で赤錆びていた。海に向かって左側に小高い丘があり、白く高い家が二、三軒建っている。沖を見はるかす展望台がそばえていて、ロシアの厳しさを表しているようであった。クイブの町とは異なり、格段の暖かさで、抑留されてから約二年目にナホトカへ着いたことは誠に幸せなことであった。

誰の物やらわからない汚れた背のうとロシアの冬服を貰う。三日目から作業が始まる。港湾の護岸工事で、広い海岸線にはブルドーザー、削岩機、クレーンなどが物々しく置かれていた。働いている捕虜たちの姿も見えた。トラックに小石を積むのが作業であった。スコップですくい、積むだけであるが、楽ではなかった。小石は放りやすいが、二キロぐらいあるとな

かなか腕にこたえる。頭ぐらいのものがあつたので、これくらいのもので両手に抱えたが、腰から上に上がらない。横州を呼んでようやくトラックに乗せた。今更のように身の衰弱を感じた。ナホトカへ来てから飯盒の飯も一人三分の一くらいになり、シベリア麦の柔らかい雑炊で元気づいてきた。もうすぐ内地へ帰れるという喜びの日々であった。また、汐の香りがたまらなかつた。一面にアオサが付いているのだ。舞鶴に帰ることを知らしてやりたいと思いつながら、ロシアからの指示がないので、じれったい日々が過ぎた。

二十日余り過ぎてダモイの朝が来た。全員門の前に呼ばれて集合する。ロシア兵と日本の兵が名前を呼んで確認する。復唱して、いよいよ間違いないことがわかってかんぬきを抜く。私は、扉を開いた瞬間、鬼の口を飛び出した思いがした。韋駄天のように走った。私の前を十メートルくらい走った者がつまずいて転ぶ。起き上がって走る。三百メートルばかりの間に転んだ者を四、五人見た。帰還船の日の丸を見て命限りに走った。荒波に削られ丸くなった石ばかりだったし、

また、アオサの胞子にまみれた石だからよけいに滑ったのである。

乗船場はかなり広い所であった。緊張がほぐれた私は、近々と日の丸を仰いで涙がにじんだ。ロシア兵と日本の兵が立っている。敬礼して皆と並ぶと、員数を確かめてからすぐ乗船を許される。出航の汽笛が鳴るとロシア兵二人と労働者たちが鉄条網の作業場から手を振っていた。船が沖に出ると何となく名残惜しい気持ちであった。ナホトカのカラスが四、五羽後を追うので、私は甲板の上から手を振った。船の上から見下ろす日本海は意外に穏やかであったが、船足の遅いのはもどかしい思いがした。鎚で叩く程しか走らないのである。一刻も早く日本に帰りたい心が強過ぎるために、普通速度が遅く感ぜられたのである。

夜半騒々しい音がするので耳を澄ましていると、ただならぬ心配がする。ドタドタとし、また、叫ぶような声である。階下の隣も騒がしい。一緒に寝ていた横州が「俺も出る」と気負っているから、私はとっさに気づいて、「横州出るな」と手を取って引き止めたが、

横州は甲板に上がって行った。二十分ばかりして横州は帰って来たが何も言わなかった。大勢で二人の捕虜を海に放り込んだというのを後で聞いた。軍隊で、またシベリアで、ひどい目に遭った捕虜達が示し合わして大勢で甲板に引きずり上げるのはたやすいことである。誠に哀れなことではあるが、戦争は悪魔の世界である。二度と犯すべきではない。

翌日の昼頃「オーイ日本が見えるぞ」甲板で叫ぶ音がするので、皆がどやどやと甲板に上がる。日本が霞のように浮かんでいる。涙が出るほど嬉しかった。両手を上げて子供のように声を上げて喜ぶ者もおった。

昼過ぎ、舞鶴に着いた。埠頭に出迎えた人たちは老人、婦女子ばかりであったが、皆涙を溜めたような顔であった。小旗を振って喜んで迎えてくださった人々に、私達は「ありがとう」よりほか言う言葉を知らなかった。舞鶴の町は焼き払われていた。道々に蜜柑の皮が沢山散らばっていたのでそれに走って口に入れる者や、畑の垣にかけている大根葉を口にする者もおったが、私は我慢した。援護局へ入ってから帰郷の手続

きなど済ませて入浴する。シベリアで入浴したのは二度だけで、一度はシャワーであった。存分に水を飲んで腹をふくらました。

三日目の朝、開拓地で別れた生後六カ月の娘の夢を見た。生家の門にて日の丸の小旗を振り「父ちゃんもんだ、父ちゃんもんだ」と二度大声を上げている。別れたときの丸い顔で鮮やかなかわいらしい顔である。女に抱かれて旗を振っているのであるが、女は誰やらわからない幻である。すぐに湯殿に入って二人で足を洗う。背が高くなっていたので、大きくなったなあと言つて座敷の踏段に上がった時一度に消えた。それが我が子との最後の別れであった。夢とはいえど、現実と全く変わらない悲しい夢であった。抱いていたのは妻であった。霊となって私に会いに帰つたのである。

出征後、転々として無順に收容され、チフスにかかり果てたのである。

生家では妻が待っていた。手拭いを被っているののけて見たら一本の毛もない丸坊主であった。チフスにかかり脱けていたのである。そして「久美子は死ん

だ」と言うや、すがりついて泣く。思えば、めとった時に帰つただけの故郷である。八年間希望を絶やさなかつたが、事、志と相入れず弱法師よろぼしの如き態をして帰つて来た。それでも母は大変喜んで湯を沸かしていた。乞食のような服を見て、浜に持つていって焼けつと言うので、舞鶴で貰つた中古の作業服とナホトカで貰つたロシアの綿の入つた冬服だけを残して全部焼き捨てた。飯盒も穴が開いていたので海に捨てた。全く丸裸の身であった。私は湯水の溢れる様を見つゝ故郷のありがたさをしみじみと思つていた。一月十三日、外は寒かつたが体はほのぼのとして温かつた。湯槽より出て無傷の身体を母に見せた。凍傷にて痺れている左足のことはおくびにも出さなかつた。

シベリアから引き揚げて以来半世紀を過ぎた。戦後はずでに昔である。今更それとも思うこともあるが、二度とあるまいし、またあつてはならぬ敗戦の記録である。そこに何があつたか、顧みることは決して無為ではない。悲劇に終わったシベリアの捕虜たちの姿

を、生きざまを、正しく綴る決心をした。また、自分を見失うまいと必死に生き抜いたシベリアである、迷うことなくペンを握った。

私は開拓団に六年、軍隊に四カ月、シベリアに二年過ごした。このために、シベリアの記録は独立したものであったが、軍隊の続きのようでもあり、綴りやすくなっていたので取り入れたものがある。

ポツダム宣言の後、敗戦のつぼの中にあつた日本である、もがいても叫んでも逃れることの出来ない羽目に陥つていった。全国焼け野が原となり、国民は塗炭の苦しみの中にあえいでいた。この頃、シベリアの捕虜たちも飢えと酷寒に耐えきれず、私のいたクイブシェフカの収容所では毎朝三十人から四十人以上の死者が出ていた。日本をめぐる巨大な海流が太平洋に大渦を巻き起こし、日本海や玄界灘に狂乱の如くたぎっていたような思いがする。この大渦に翻弄されて沈没する小舟、それに似た日本の戦後であつた。

シベリアの犠牲者は推定六万人という。この人々は肉親の顔も見ず、優しい言葉一つも聞かず、飢餓と寒

さの中で無念に絶命した。戦争は悪魔の仕業である。人を殺して喜ぶのである。これで万物の霊長と言えるだろうか。私は運よく帰つて来たが、その当時はよかつたとはばかりは思えなかつた。ただ、二年間を省みて心にもとることのなかつたことだけは何とも言えない喜びであつた。特に撫順から死線を越えて帰つた妻をありがたく思っている。添ひて五十年、老いさらばう私に思つたより優しいのである。苦しみに克つたのであろうと思いつつ、開拓の日々もまんざらではなかつたように思っている。開拓の友、軍隊の友、シベリアの友、皆世を去つた。その中で妻と二人、天の命をむさぼっているのを不思議に思うときがある。

この記録は自分の目で見て、足で踏み、手に触れたものばかりである。概念や想像、創作などは一切なく、誠に拙いものばかりであるが、正直に偽りなく綴つてきたのでさわやかな気分である。

飢えと寒さの中で墓掘りをしつつ果てたメルゼンの友、雪掻きをしながら倒れた友、伐採地の友、鞆丸を切り落とした友など、戦争のもたらした犠牲者の悲劇

が二度とないよう、シベリアに果てた人々のご冥福を祈りつつペンをおく。

満州からシベリアの八年

愛媛県 宇都宮 政 壽

大正九年十月八日、東宇和郡笠置村の農家に長男として生まれる。

県立宇和農業学校（現宇和高等学校）の修学旅行が旧朝鮮、満州の十五日間であった。この旅行で見聞した新生満州国の、限らない希望と夢を抱かせる広大な新天地に魅せられた私達は、「卒業したら満州だ」と少なからぬ影響を受けたのである。

帰国後間もなく肋膜炎と腹膜炎に罹病、療養生活二年半、この間には医師が父に「会わせる人があれば呼ぶように」と危篤の時があったと後で聞かされた。全快後、石城村役場に一年間勤める。

昭和十五年七月、徴兵検査を受け、丙種に合格。

十六年、私立中野高等無線電信学校在学中の九月、満州国治安部警務司の採用試験に合格。学校は繰り上げ卒業を認め、面接の係官から新京（現在の長春）までの赴任旅費を支給され、早速に荷物をまとめて帰郷。驚き不安がる両親に見送られ、十月一日、新京の警察学校に入る。

同月二十四日、通化省公署警務庁警備部無電室勤務を命ぜられ着任。ここでは受信送信の実地訓練と、暗号の教育と訓練であった。

十七年八月一日付で濛江県公署警務科無電室に転勤。朝陽鎮という駅からは軍か県公署のトラックに便乗するのが唯一の交通手段、電灯がひかれておらずランプの生活。星も出ない夜など、道ですれ違った人もわからぬ真の闇になる街であり、大勢の共匪が帰順帰農している密林に囲まれた山岳地帯の物騒な街でもあった。

三カ月でランプの生活から解放され、十一月一日付で鴨緑江河畔の輯安県公署警務科無電室に転勤。国境の故か憲兵隊、鉄道警護隊、県警、税関の職員も剣を